

芝浦アーバンデザイン・スクール

PROJECT MEMBER

〈代表者〉 デザイン工学部 デザイン工学科 教授：前田 英寿

〈構成員〉 デザイン工学部 デザイン工学科 教授：桑田 仁、篠崎 道彦、谷口 大造 特任准教授：横山 太郎

芝浦アーバンデザイン・スクールは市民と行政(公)、企業・NPO(民)、大学等(学)が連携して都市の魅力を再発見・再検討するプロジェクトである。大学はその中心的役割を果たしながら実践的な教育研究力を高めていく。開かれた場になるようにまちづくりの国際用語 Urban designを用いる。2013年度から東京都港区と連携して芝浦・海岸地区で始動した。この地区は都心と港湾の間にあって運河を介して新旧が混在する独特の界隈である。本学開設の地でもある。環境保全、安全安心、持続経済など都市のあり方が問われる中、学び合いを通して地域の可能性と課題を探っている。3年目となった今年度は設計演習の課題変更、国際ワークショップへの大学院生参加、研究成果の国内外発表、公開講座における区民講座との共催など、過去2年間の実績を学内外に展開しながら国際交流と地域連携が融合する取り組みも着手した。



アーバンデザインスクールの模式図

2015年度 活動の成果

教育

アーバンデザイン・スクールは学生がまちづくりに必要な次の3つの力を修得することを教育の目標としている。社会の中で価値を持続する建築物と都市空間を見抜く発見評価力。社会の中で価値を持続する建築物と都市空間を考案し創造する企画設計力。様々な主体と協力して力を発揮する対話協働力。以上の目標に向けてデザイン工学科建築・空間デザイン領域の教育に地域や学内外との連携を取り込んだ。①大学と地域の交流型演習：3年生が地域を題材に建築都市計画演習を行なった。前期プロジェクト演習4(卒業研究着手条件科目46名履修)は港区内に敷地を設定して前半オフィス、後半マンションをデザインした。後期プロジェクト演習8(同46名履修)は前半港区臨海部に劇場都市、後半港区指定文化財旧協働会館の隣地に木造建築を計画した。②特別講義：地域に携わる専門家



学生の企画運営による特別講義

を学外から招いて特別講義を8回行なった。その内3回は学部生が企画運営した(8月8日日建設計平井祐介、11月15日鷺野宏デザイン事務所、12月15日A/E WORKS 佐藤考一)。その他は授業で実施した(4月18・25日豊橋科学技術大学水谷晃啓、10月1日戸田建設長谷川亮子、10月15日タカラスタンダード柏崎将貴、11月20日五洋建設前田泰芳、11月26日静岡県庁中村悠)。③国際建築・空間デザインワークショップ：タイのモンクット王トンプリ工科大学(KMUTT)を招いて建築・空間デザイン領域研究室所属大学院生と東京都心の水辺に関するワークショップを行なった(12月12～19日)。

研究

アーバンデザイン・スクールは次の3つの方法で地域の課題を見える化することを研究の目標としている。地域の現状を模型・図面・写真によって表現する。地域が持つ可能性を建築物と都市空間のデザインを通して検証する。国内外・地域間の比較を通して対象地域の課題を相対化する。以上の目標に向けてデザイン工学科都市デザイン研究室(前田英寿教授)が港区と芝浦・海岸地区に関する研究を行なった。①水辺都市の研究：修士1年田中南帆が港区の街区公園に関する研究を日本建築学会大会に発表した(9月4日)。芝浦・海岸地区の都市模型と都市形成史図を作成した。成果を第10回SEATUCシンポジウムに発表した(2016年2月24日)。②田町駅西口駅前まちづくり勉強会：地元企業からなる「田町駅西口駅前まちづくり勉強会」を指導した(6月3日、7月22日)。先進事例3箇所を訪問調査した(6月10日東京大丸有、6月17日東京日本橋室町、7月8日千葉県柏市柏の葉)。③アーバンデザ

インセンター：大学と地域の連携組織アーバンデザインセンター4箇所を訪問調査した(6月1日福岡アイランドシティ、6月26日柏、7月6日松山、7月10日柏の葉)。成果を日本建築学会大会パネルディスカッションに発表した(9月4日)。

社会貢献

アーバンデザイン・スクールは次の3点から学内外がまちづくりを学び合うことを社会貢献の目標としている。市民・行政・企業・学生が同じ場に集まって議論する。大学の成果を開示して社会の反応を教育研究にフィードバックする。まちづくりの手法や動向を大学が媒介して地域と共有する。以上の目標に向けてデザイン工学科前田英寿・桑田仁両教授と両研究室が中心になって学内外が学び合う機会を設けた。①公開講座：第1回11月12日本学主催「城下町鶴岡の建築とまちづくり」(東北公益文科大学高谷時彦教授)聴講56名。第2回11月14日港区芝浦港南地区総合支所主催「知生(ちい)き人養成プロジェクト」芝浦百景まちあるき編(桑田仁教授)参加21名。第3回12月19日同プレゼンテーション編(前田英寿教授)参加21名。②成果開示：前田研究室が芝浦運河まつりに芝浦・海岸地区の都市模型と都市形成史図を出展した(9月27日)。前田桑田両研究室が芝浦工業大学COC地域共創シンポジウム「大学とまちづくり・ものづくり」に参加し登壇した(10月10日)。桑田研究室4年高久ゆうが港区主催「区長と区政を語る会」に参加した(11月3日)。建築・空間デザイン領域3年生がプロジェクト演習8優秀作6点を港区芝浦港南地区総合支所主催ベイエリア365DAYSに出展する(3月19日)。



芝浦海岸地区都市模型



芝浦百景プレゼンテーション編

歴史的建築物の隣地を 木造でデザインする

2012年度以来デザイン工学科建築・空間デザイン領域3年後期プロジェクト演習8後半課題は芝浦キャンパスから徒歩5分に残る「旧協働会館」を題材に建築設計演習を行なってきた。旧協働会館は1936年芝浦花街の見番として建てられた木造商業建築である。戦後から2000年まで港湾労働者の宿泊所（協働会館）に使われて2009年港区が文化財に指定した。昨年度までの演習は本体を市民が自由に使う施設へ転用・増改築するコンバージョンを課題としていた。昨年度末その保存利活用計画が決定したことから今年度は隣地の駐車場約700㎡に旧協働会館と連係する建物や空間を木造でデザインする課題に変更した。歴史的建築物の保全活用は既に常識化した感があるものの街並みや街区など面的な空間整備に展開する例は限られる。とりわけ市街地の商業建築のそれは単体整備に限られ、重層的な都市空間を実現する機会を逸している。近年資源循環やユニバーサルデザインへの要請とともに耐震耐火技術も進み、都市木造とよばれる中層の建物や公共施設を木造で建築する試みが出てきた。今年度の演習はそうした社会的動向も考察しながら木造建築を通して具体的な空間とディテールからまちづくりを構想する訓練になった。優秀作6点を港区芝浦港南地区総合支所が主催する地域の年度末イベント「ベイエリア365DAYS」に出展することになっている（2016年3月19日）。



プロジェクト演習8作品

国際建築・空間デザインワークショップ

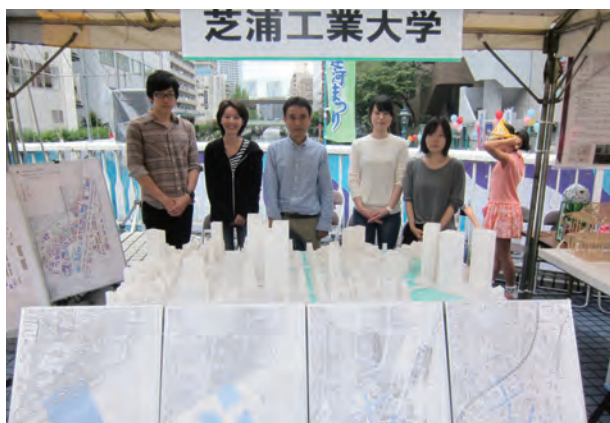
タイ・バンコクのモンクット王トンプリ工科大学(KMUTT)から建築・デザイン学部4年9名と教員1名を招いて本学デザイン工学科建築・空間デザイン領域研究室所属修士1年8名と8日間の集中ワークショップを行なった。アーバンデザイン・スクールの対象地である港区南部から品川区北部の東京湾岸を対象とし、これまで蓄積した研究成果を用いて水辺の創造的保全を課題に建築都市デザイン案を作成した。このやり方は地域で活動する大学COC事業と海外に展開するスーパーグローバル大学等事業(SGU)を融合させたものである。昨年は韓国中央大学校(CAU)を招いて学部3年生が参加し、今年は大学院生を対象とした。両校混合の3グループが芝浦キャンパスを拠点に現地調査、課題分析、プレゼンテーションまで一連の作業を全て英語で行なった。首都の都心にありながら水辺の自然と旧東海道の歴史を双方色濃く残す東京湾港南地区。都市観光を介して交流を促すアイデアが多く出た。創造的保全の参考事例として埼玉県川越市の重要伝統的建造物群保存地区を皆で見学した。本学前田教授とKMUTTスナリー講師がそれぞれ東京とバンコクに関する特別講義を行なった。前田教授が講師を務める港区区民講座にスナリー講師がゲスト参加した。副学長とデザイン工学部長が最終日の発表会に来場した(12月12～19日)。



国際建築・空間デザインワークショップ

芝浦運河まつり

芝浦キャンパスの地元で毎年開催する芝浦運河まつりに昨年に引き続き参加した。JR田町駅東口歩道と芝浦運河沿い遊歩道に地元の商業者や住民団体、企業や各種機関がテントブースを設ける。本学から都市デザイン研究室と地域連携・生涯学習センターが参加した。アーバンデザイン・スクールが標榜する研究の見える化の好機と捉えて芝浦・海岸地区に関する成果を披露した。ひとつは都市模型。昨年は芝浦・海岸地区全域縮尺1/1000模型畳2枚大を出展した。今年はJR田町駅周辺に限定して縮尺1/600模型畳1枚大を作成した。縮尺を上げることによって田町駅東口北地区など最新の建築都市開発動向を盛り込んだ。この地区が水辺都市であることに改めて気づかせる作品になった。年度末この模型を港区芝浦港南地区総合支所に寄贈する予定である。もうひとつは都市形成史図。明治から戦前の埋立てと戦後の土地利用の変遷を地形図上に表現した。この地区がわが国の近代化とともに成長し、今なお変化する生きた都市であることがわかる。市民が自ずと理解し美的にも優れた模型と図面を作るのは容易ではない。この出展に向けた集中作業は表現の鍛錬になった。学生は自分の手を使って作ったからこそ当日老若男女の住民や来街者からの意見質問に対しその場で臨機応変に応答することができた。その姿は頼もしかった(2015年9月27日)。



芝浦運河まつり

知生(いき)き人養成プロジェクト

港区芝浦港南地区総合支所が主催する区民講座。地域の魅力を学び自ら発信する人材を募って養成するために今年度から始まった。今年度は初回のため人数を限定して区内在住または在勤の約20名が受講した。この地区にキャンパスを構える本学と東京海洋大学が企画運営と講師派遣に協力した。本学はアーバンデザイン・スクールの公開講座に位置づけ、企画段階から協力して「芝浦百景」と称する環境学習を2回に分けて開講した。桑田仁教授がまちあるき編を担当して芝浦・海岸地区を見学しながら景観の捉え方を学んだ(11月14日)。前田英寿教授がプレゼンテーション編を担当して受講生が芝浦・海岸地区で撮影した写真を題材に景観の背後にある都市の歴史や街の構造を学んだ(12月19日)。これまでアーバンデザイン・スクールの公開講座は全て大学主催の座学だった。この区民講座を通してはじめて学外と組織的に共催することができた。写真という身近な趣味を景観という学術的な題材に結びつけたのは大学のアイデアである。フィールドワークと実習形式の講座が可能になったのは港区芝浦港南地区総合支所の運営力である。大学と地域が力を合わせると相当な成果が期待できることが実証された。今後の課題として学生の参加が挙げられる。学生がこうした区民講座を受講するには単位認定や企画運営への参加など動機づけが必要であろう。



芝浦百景まちあるき編